

湘南藤沢学会 シンポジウム・研究ネットワーク基金成果報告

がんの親をもつ子どもを支援するプロジェクト —CLIMB®プログラムボランティア養成講座—

看護医療学部 准教授 新藤悦子、茶園美香
助教 仙波美幸

1. 日時：会場

平成 26 年 3 月 15 日 土曜日 午前 10 時～16 時
慶應義塾大学信濃町キャンパス孝養舎 2F 202 教室

2. 企画の概要

1)がん患者の子どもの置かれている状況と本企画の目的

子育て世代が、がんにかかるとする割合が増加してきている。患者は、自分の病気への不安や心配と同時に子どもに病気や治療をどう説明するかを悩み、説明することを避ける傾向がある。一方、親の変化を目の当たりにしているのに説明を受けていない子どもは、罪の意識や、親が死ぬことへの恐怖をもちストレスフルな状況におかれている。このような状況に対して、がんと診断された時から、子どもに親の病気や治療を説明することの重要性が注目され始め、一部の医療施設で支援プログラムが開始されている。

申請者らは、慶應義塾大学病院におけるがん患者の子どもとその親への支援プログラム（CLIMB®プログラム日本版）を平成 26 年度より開始する予定である。また、外来、病棟、あるいは在宅療養中を含め、患者が療養する場で支援が継続される必要がある。その準備として、平成 25 年 7 月、平成 26 年 2 月に講演会を実施し、将来医療を担う慶應義塾大学生および慶應義塾大学病院の医療スタッフを対象に啓発活動に取り組んできた。この問題は、大人と子どもの両者がストレスフルな状態に置かれるために、主治医、看護師に加えて、子どものケアの専門家、精神ケアの専門家、緩和ケアチーム、ソーシャルワーカー、ボランティアなど、他職種がそれぞれの専門性を活かして、医療チームで取り組むことが重要である。

今回は、支援プログラムチーム作りのために、慶應義塾大学病院に勤務する医療者および看護学生を対象に、CLIMB®プログラムボランティア養成講座を実施し、CLIMB®プログラム日本版についての理解とボランティアの役割を学ぶことを目的とした。

なお、CLIMB® (Children's Lives Include Moments of Bravery) プログラムとは、Sue P. Heiney (College of Nursing, University of South Carolina, RN,FAAN) らが開発した親のがんを伝えられた子どもたちを支援するプログラムである。大沢らによって親を含めたプログラムとして CLIMB®プログラム日本版が実施されている。本申請に当たっては「ファシリテーター養成講座」としていたが、本プログラムで認定されているファシリテーターとは異なるために、「ボランティア養成講座」とタイトルを改めた。

2)本養成講座の目標

- (1)がん患者の子どもにがんを説明した後の子どもの反応が理解できる。
- (2)がん患者の子どもにがんを説明した後に生じる感情への対処の方法が理解できる。
- (3) CLIMB®プログラムの進め方、ファシリテーター・ボランティアの役割を理解することができる。

3)プログラム内容：

(1)講義：CLIMB®プログラム日本版の概要

講師：大沢かおり（東京共済病院、医療ソーシャルワーカー）

(2)CLIMB®プログラム日本版の体験学習（演習）

講師：村瀬有紀子（東京医科歯科大学病院 チャイルドライフスペシャリスト）

大沢かおり（東京共済病院、医療ソーシャルワーカー）

認定ファシリテーター：茶園美香（慶應義塾大学看護医療学部）

近藤咲子（慶應義塾大学病院看護部）

竹内麻理（慶應義塾大学病院緩和ケアセンター医師）

(3)参加者の概要（詳細は別紙）

人数：32名

職種分類；看護師：17名、看護教員：2名、看護学生：11名、医療ソーシャルワーカー：2名

3. 成果と課題

1)講義概要

大沢氏からは、「病気を伝えたあとの支援プログラム」CLIMB®プログラム日本版の目的、対象者、プログラムの構成と内容、進め方の概要、ファシリテーターの役割とボランティアの役割について説明があった。本プログラムはがんになった親をもつ子ども（小学生）を対象に、子どもの持っている力を引き出し、親の病気にとまなうストレスに対処する能力を高めることを目的としたグループワークで、1クールが6回で構成されている。毎回テーマを決め、感情を取り上げて進められる。1回のプログラムは、①お菓子を食べながら自由な会話（導入）、②落書きタイム ③テーマにそった activity で構成されている。この中で子どもは、がんという病気や治療について学び、自分が持っている感情への対処方法（自分の気持ちの表現の仕方）を学ぶ機会になっている。

2)演習の概要

CLIMB®プログラムを構成している6つのプログラム（以下を参照）について、内容と進め方について実際に各参加者が「参加している子ども」のつもりになってプログラムを体験学習し、ファシリテーター・ボランティアとしての役割の担い方を学ぶ。

セッション回数	目標	扱う感情	活動
セッション1	子ども同士でがんまつわる話を共有し孤立感を弱める	幸せ、楽しい	自己紹介シートを記入
セッション2	がんという病気とその治療にしている知識を得る	混乱	人形を作り、点滴をしている様子を再現する
セッション3	悲しみの感情を表現し、緩和する	悲しみ	感情のお面づくり
セッション4	子どもが持っている強さを引き出して不安を緩和する	怖さ	強さの箱づくり
セッション5	怒りの感情を適切に表現し、対処する手助けをする	怒り	怒りバイバイサイコロを作る
セッション6	がんを持つ親とのコミュニケーションを手助けする		お見舞いカードを書く

3)参加者の反応

今回の企画へ参加者は、平成25年2月5日に実施した講演会にも参加し、平成26年度から慶應義塾大学病院で実施されるCLIMB®プログラム日本版へのボランティア志望者である。

参加者は、自分自身をがん患者の子どもとして想定し、実際にプログラムを体験した結果、自身のプログラム体験を通した子どもの気持ちや、プログラム内容の意味等を理解することができた。また、プログラムにおけるボランティアの関わり方について、子どもとの距離の保ち方や、評価的な関わりをしないことの難しさなど実践的な子どもへの支援の在り方を学ぶことができた。

4)今後の課題と展開

慶應義塾大学病院チーム（代表：看護医療学部准教授茶園美香）は、今回のボランティア養成講座を徐行したメンバーの協力を得て、平成26年7月と11月に本プログラムを開催していく予定である。学童期の子どもをもつがん患者に対して、本プログラムの周知のしかたが課題である。

また、学童期の子どもをもつがん患者への啓発や今後慶應義塾大学病院で行われる本プログラムの紹介を兼ねて平成26年3月26日に患者を対象とした患者サロンを実施する。

さらには、平成26年10月にはがん患者と子どもへの支援に関する関心を高め、行動化への動機づけとするために看護師を対象と講演会を予定している。